ＩＣＴ学習会
子どもの心のシャッター下ろさないために！

平成28年7月12日(火)、エポックなかはらにて川崎市ＰＴＡ連絡協議会主催のＩＣＴ学習会が開催されました。昨今、スマートフォンなどのインターネットに接続できる機器が、子どもたちにも急速に広がってきており、それに伴い生活習慣が乱れたり、トラブルや犯罪被害に巻き込まれたりするなどの報告も多くなっています。そういった中、子どもたちのインターネットの利用を全て否定するのではなく、賢く安全に利用できる子どもを育むために、私たち大人ができること、子どもたち自身が考えなければならないことについて、講演を通して多くの保護者と共に学びました。

齊藤　長行 氏

安心協ＩＬＡＳ―川崎市ＰＴＡ連絡協議会 実施結果から見えること

（株）ＫＤＤＩ研究所　研究主査　博士（メディア・デザイン学）
齋藤　長行 氏

昨年、川崎市ＰＴＡ連絡協議会では、市内保護者を対象に〝安心協ＩＬＡＳ〟を実施しました。（回答者数１０１５人）その結果から見た、川崎市の保護者の傾向と対策について報告していただきました。

傾向

- 保護者向けのインターネット理解度テストでは、適切なセキュリティー対策や違法情報への対応が弱いものの、正答率90％を超えており、中高生と比べても保護者の〝インターネットリテラシー〟は高い。
- 保護者自身の適切なインターネット利用に対する自信はあるものの、子どもへの適切な指導には自信が無い。

子どもに対する指導に自信が無い要因

- 親の目の届かない所での利用に対する適切な指導方法が見いだせない。
- 制限すべきか、ある程度放任すべきかのバランスを決めきれない。
- 子どもたちが利用している最新機器、アプリ等で起きている問題についての対処方法が分からない。

対策

- 最新機器・アプリを知り、それを介して起きている問題事例を知ること。
- 問題事例に対しての具体的な解決方法や、実際に取り組んで良い成果が挙げられた実例を学ぶこと。

※安心協
安心ネットづくり促進協議会の呼称
※安心協ＩＬＡＳ
総務省により開発され高校１年生を対象に実施されている、青少年のインターネット上の危険・脅威に対応する能力を可視化するテスト（ＩＬＡＳ）を、安心協が保護者から小学生まで調査対象を広げ、テストを受けるだけでも気付きや理解につながるよう作成したもの。
※インターネットリテラシー
情報ネットワークを正しく利用することができる能力。

竹内　和雄 氏

スマホ時代の大人が知っておきたいこと

兵庫県立大学環境人間学部
准教授（教職担当）　竹内　和雄 氏

昨今、ＬＩＮＥやチャットといったコミュニケーションツールを利用している子どもたちは、保護者世代の大人にとっては違和感のない「メールをする」「電話をする」というワードを発しただけでも、その相手に対してジェネレーションギャップを感じて、「この人と話してもダメだ」と、心のシャッターを下ろすのだそうです。

講演の中では、竹内研究室の大学生２人による、子ども向け「スマホ・ケータイ安全教室」のデモンストレーションが行われました。日頃より、各地の学校へ赴き教室を開催されているそうで、学生生活の一部としてインターネット（ＬＩＮＥ、ユーチューブなど）に触れている自身の日常生活の様子を紹介したり、参加者の緊張をほぐすために会場全体でハイタッチをしてみたりといった、テンポの良い発表でした。

こういった学生の授業は、小中高生を通して93％以上と高く、スマホ以外でも、今はゲーム機やタブレットなどネット接続できる機器が子どもたちの身近に増えています。小中高生の６割が、全く面識のない人とＬＩＮＥ等のＳＮＳで交流した経験があるとのデータも出ています。川崎でも流行りつつあるツイキャス（ツイートキャスティング）やミクチャ（ミックスチャンネル）、出会い系など、大人の知らない所で利用している子どもたちが少なからずいるのが現実なのです。ただ、そこには何かしらのリスクが伴うものです。安易にアップをした動画や写真などから、個人情報が容易に解り、トラブルに巻き込まれることがあるかもしれません。ＳＮＳで知り合った人と安易に会うことの危うさは、いつも誰かとＳＮＳでつながっているという安心感から防犯意識が薄れてしまうのかもしれません。頭ごなしに止めさせるのではなく、そういった問題を具体的に話し、子どもたち自身に考えさせることが大切です。

無自覚でトラブル

講演の中では、スマホやケータイを介して仲間外れや、ケンカとなった事例も挙げられました。

皆さん、この２つの事例の問題点が分かりますか？（図　ＳＮＳの事例参照）

文字には、感情や抑揚といったものが表れません。そのため、文字通りに受け止めると誤解を生じ、トラブルに発展することもあるのです。

今何が起こっているか。それは、高性能なスマホが普及し、ケータイネイティブ２世と言われる小学校低学年生が、当たり前のようにケータイ・スマホを持つ低年齢化。また、ケータイ・スマホを介しての子どもたちのトラブルは、無自覚に悪意のないところで起こっているからこそ、教育が可能であり必要であるのに、それが行われていない、と竹内先生は話されます。

図　ＳＮＳの事例

スマホの問題は心の問題

大人はテレビや新聞、会話を通して世間一般の常識を身につけていきますが、子どもの常識は、ＳＮＳでつながっている少数の中でつくられています。だから、子どもに「一般常識で考えろ」と言っても、大人が思うようには理解してもらえない。そのため指導する側はまず、この大人と子どもの常識のギャップを埋めていく教育が必要であるとも話されました。

大人が思っている以上に、子どもたちはインターネットに関して知っていて、大人が何かを学んだとしても、子どもたちはその先に進んでいます。ではどうすればよいのか？

実は簡単で、大人が子どもたちから学ぶこと。もし相談を受けたら、頭ごなしに否定したり、「分からない」で片付けず、身近な周りの大人が一緒になって考えていくこと。「スマホの問題は、実は心の問題なのです。」と締めくくられて講演が終わりました。

皆さん！お子さんの心のシャッターを閉ざさせてはいませんか？

大人には興味のないアプリや動画でも、子どもは面白いと感じているのが事実です。時々は子どもと共に楽しんでみるのもいいかもしれません。いつも心の窓がオープンである親子関係でありたいものです。

追記

学習会翌日、竹内研究室の大学生お二人が、川崎区の宮前小学校と富士見中学校で授業をされました。

大変好評だったようです。

（ＩＣＴ学習会後に回収したアンケートにも、子どもたちを対象にした教室を開催してほしいとの声が多数挙がっていました。）

川崎区　宮前小学校での授業風景

川崎区　富士見中学校での授業風景

第64回日本ＰＴＡ全国研究大会
徳島 うずしお大会

川崎市ＰＴＡ連絡協議会　会長　齊藤　植栄

平成28年8月20日、21日に第64回日本ＰＴＡ全国研究大会徳島うずしお大会が、阿波踊りや鳴門海峡のうずしおで有名な徳島県で開催されました。

今大会は例年8千人規模で行われる全国大会に比べてコンパクトな形で、全国から約４８００人の仲間が一堂に集いました。

20日は7つの分科会で10の領域を取り上げ、基調講演や実践発表、パネルディスカッションなどが行われ、21日は全体会として、京都精華大学長の竹宮惠子さんの記念講演が行われました。

今大会のメインテーマは、『家庭と学校の連携のもとに地域社会全体の教育力を生かしたＰＴＡ活動』。『健やかな体と思いやる心をもつ子どもを育てるＰＴＡ活動』、『大人がともに学び交流し合えるＰＴＡ活動』と社会教育団体であるＰＴＡ本来の活動を3本柱とし、『徳島発！渦巻く力をこれからの社会に巣立つ子どもたちのために～まけいっぱいの愛を注ぎ込もう！～』を大会スローガンに、徳島県内の多くのＰＴＡ関係者の方々から多大なる歓迎を受けました。このスローガンの中に徳島県を代表する名所や名産が隠れているのがわかりましたでしょうか。その真相は不明ですが、『渦巻くぅ～うずしお』、『巣立つ～すだち』とさりげなく、徳島県をアピールするとは、さすが徳島県といったところです。

さて、今大会には川崎市ＰＴＡ連絡協議会から各区1名の代表者と私と事務局の9名が参加しました。毎年のことですが『見せ知らずの人が2泊3日の旅をする』、どうでしょうか、この緊張感というのはＰＴＡ全国大会等の各種大会に参加した人でないとわからない独特の空気感で、今大会の参加者全員が羽田空港で出会うまで、とても不安だったと思います。しかし、やはりＰＴＡですね、同じＰＴＡ同志ということで、出会って数分後には、この緊張感も取れ、以前から知り合いだったような空気感に変わる、これも、ＰＴＡのなせる業と思います。

今大会2日間を通して、地域環境は変わるものの『子どもたちのために』というベクトルは、皆同じであることを再認識し、子どもと共に私たち保護者が成長していかなければならないことや、私たちＰＴＡには無限の可能性があることも再確認することができました。そして、その保護者の成長の場、それがＰＴＡであることも再認識することができました。

川崎市内ＰＴＡを代表して参加された方々におかれましては、各分科会や全体会や川崎市内の各単位ＰＴＡや各区ＰＴＡ協議会でも『子どもたちのために』というベクトルは同じでも、多種多様な活動方法があることなど、たくさんの刺激を受けたと思います。その刺激を各単位ＰＴＡや各区ＰＴＡ協議会に持ち帰り、その刺激をＰＴＡの仲間に伝え、各単位ＰＴＡや各区ＰＴＡ協議会で『子どもたちのために』の道標となり、そして、その子どもたちが『川崎で生まれ育って良かった』と感じ、その子どもたちが親となり、同じベクトルで、さらに次世代へバトンを継承できることを期待しています。

仙台大会は「絆　そして　あふれる笑顔へ」をテーマに、1日目は「組織・運営」、「地域連携」、「研修・研究」、「広報活動」の4つの分科会が開かれ、2日目には全体会、基調講演が行われました。

私が参加した第2分科会「地域連携」では〝地域と共に育む子どもたちの豊かな心・防災について〟を分科会テーマに、3グループに分かれ情報交換、各グループ発表という形で行われました。仙台という場所だったこと、また熊本地震があったこともあり、防災での地域連携についての意見が中心でした。

情報交換では、同じ内容の訓練はかりしていると参加者が減ってしまう、ならばイベントの中に訓練を組み込んでみる、あるいはその逆はどうか？自分の学校単位ではやっているけれど、中学校区合同はしていない、町内会等と絡みがなく、地域の方々との繋がりが薄い、訓練もしていない、隣に住んでいる地域の方々との繋がりもない、という地域だから、子どもたちから保護者へ、そして地域の方々へと繋がりを作ってゆくのはＰＴＡの役目ではないか？まずは強制しない簡単な手伝いから、顔の見える関係を作ってみてはどうか？ＯＢの方も誘って輪を広げてみてはどうか？とにかく楽しくなければイベントの意義がないのだから今のイベントを見直すのほどうか？などの意見が出ました。また、その他には、日中の避難所では中学生の力は重要、災害時の仙台でも重要な力になったということもあり、中学生には訓練において色々な体験をさせることが大事、彼らとの関係作り、そして彼らと地域の方々との繋がりも大切だ、役割を与えれば彼らは動いてくれる、褒めればやる気が出る、繋がりが出来る、という意見もありました。

今回の分科会に参加して、私たちがＰＴＡ活動で、学校・家庭・地域の連携を作るということは、子どもたちの安全や学校生活を豊かにするだけでなく、私たち自身や、地域にも、役立っているのだと感じました。

第72回 指定都市ＰＴＡ情報交換会

川崎市ＰＴＡ連絡協議会
副会長　山上　悟司

9月15日、16日に仙台市で第72回指定都市ＰＴＡ情報交換会仙台大会が開催されました。指定都市ＰＴＡ情報交換会とは、各指定都市の連携と、情報交換により共通の課題を見つけ、解決の方向性を検討することを目的とし、各都市の会長、役員、事務局長、教育委員会等が参加し、開催される大会です。

仙台大会は「絆　そして　あふれる笑顔へ」をテーマに、1日目は「組織・運営」、「地域連携」、「研修・研究」、「広報活動」の4つの分科会が開かれ、2日目には全体会、基調講演が行われました。

私が参加した第2分科会「地域連携」では〝地域と共に育む子どもたちの豊かな心・防災について〟を分科会テーマに、3グループに分かれ情報交換、各グループ発表という形で行われました。仙台という場所だったこと、また熊本地震があったこともあり、防災での地域連携についての意見が中心でした。

情報交換では、同じ内容の訓練はかりしていると参加者が減ってしまう、ならばイベントの中に訓練を組み込んでみる、あるいはその逆はどうか？自分の学校単位ではやっているけれど、中学校区合同はしていない、町内会等と絡みがなく、地域の方々との繋がりが薄い、訓練もしていない、隣に住んでいる地域の方々との繋がりもない、という地域だから、子どもたちから保護者へ、そして地域の方々へと繋がりを作ってゆくのはＰＴＡの役目ではないか？まずは強制しない簡単な手伝いから、顔の見える関係を作ってみてはどうか？ＯＢの方も誘って輪を広げてみてはどうか？とにかく楽しくなければイベントの意義がないのだから今のイベントを見直すのほどうか？などの意見が出ました。また、その他には、日中の避難所では中学生の力は重要、災害時の仙台でも重要な力になったということもあり、中学生には訓練において色々な体験をさせることが大事、彼らとの関係作り、そして彼らと地域の方々との繋がりも大切だ、役割を与えれば彼らは動いてくれる、褒めればやる気が出る、繋がりが出来る、という意見もありました。

今回の分科会に参加して、私たちがＰＴＡ活動で、学校・家庭・地域の連携を作るということは、子どもたちの安全や学校生活を豊かにするだけでなく、私たち自身や、地域にも、役立っているのだと感じました。

分科会内容

- 第1分科会　組織運営・広報活動
  ＰＴＡの組織づくりと広報活動について語り合おう
- 第2分科会　家庭教育・健康安全
  食育を通して地域ぐるみで子どもを育てるＰＴＡ活動のあり方
- 第3分科会　学校教育
  もっと伸びゆく学校
  ～地域と変える校務員とＰＴＡ活動の今～
- 第4分科会　人権教育
  未来につなげ　かけがえのない「いのち」
- 第5分科会　環境教育・地域連携
  地域・自然と共存する学校・ＰＴＡ
  ～昆虫館が描く循環の時代を見据えた教育とＰＴＡ活動のあり方～
- 特別　第1分科会　日本ＰＴＡ全国協議会　担当
  子どもを取り巻く課題の解決に向けて
  ～大人との関わりづくりとコミュニケーション力～
- 特別　第2分科会　文部科学省　協力
  地域防災を支えるひとづくり
  ～震災から学ぶ減災・防災・地域パートナーシップ～

9月16日　全大会 基調講演

お知らせ

食育推進コンテスト表彰式・講演会
日時　平成29年1月15日（日）午後1時30分 開会
場所　高津市民館　大会議室
内容　表彰式及び講演
講師　独立行政法人国立病院機構久里浜医療センター院長　樋口　進 氏
演題　「子どもの生活習慣を考える　～インターネット依存って何だろう？～」
参加　単位PTA1名まで参加できます

会員研修会
日時　平成29年1月19日（木）午前10時 開会
場所　高津市民館ホール
講師　大矢根　淳 氏（専修大学人間科学部 社会学科教授）
講演題　「災害時に家族を守るために学んでおくべきこと」
参加　単位PTA3名まで参加できます

家庭教育学級
日時　平成29年2月23日（木）午前10時 開会
場所　高津市民館ホール
講師　弓削田　健介 氏
講演題　「いのちと夢のコンサート」
参加　単位PTA3名まで参加できます
　　家庭教育に関心のある未就学児をお持ちの保護者

安全・安心な中学校給食の提供に向けて

中学生の時期は、心身が著しく発達する時期です。特に1日3回の食事で栄養バランスをとることは、心身の成長の基礎となるものです。その中で、学校給食は、成長に必要な栄養を補完するだけでなく、クラスメイトや先生と一緒に食べることを通じて社会性を身に付けるとともに、食に関する正しい知識を習得し、将来にわたる望ましい食習慣を形成するなど、中学生にとって重要な役割を果たします。

中学校給食の献立

中学校給食の献立は、単に小学校給食の量を増やすのではなく、国が定める中学生に合った栄養量の摂取基準を踏まえ作成されます。中学生の栄養量の摂取基準は、小学校中学年と比較すると、およそ1・28倍となっており、この基準に沿った献立となるよう、市の栄養士が日々の献立を作成していきます。また、生徒に喜んでもらえるよう、彩りや、旬な食べ物などを取り入れた献立を作成していきます。

給食で使用する食材

市立学校の給食で使用する食材は、国内産を基本として、理由として、日本の四季に収穫される旬の食材は、栄養素や機能性成分が豊富であり、食育の観点からも日本の食文化等についても子どもたちに伝えていきたいという思いがあります。また、輸入される食材よりも、産地や流通経路等の確認が容易に行え、安全性に関わる様々な日本の基準に則って生産されているからです。さらに、保存料や着色料、遺伝子組換え食品は不使用とし、残留農薬検査や細菌検査を実施して、安全性の確保に努めています。

給食費について

前述の給食で使用する食材は、公益財団法人川崎市学校給食会が一括して購入を行っています。保護者から学校に納められた給食費が、学校から給食会に送金され、青果や食肉業者等に支払われます。

保護者から納められた給食費は、全て食材の購入に充てられています。そして、その他の経費（光熱水費や人件費、施設設備の修繕費など）は市が負担しています。このため、保護者から納められた給食費の範囲で、日々の献立が作成されており、給食費に不足がある場合には、献立にも影響を及ぼしてしまいます。こうしたことから、学校給食は、保護者から納められた給食費で支えられています。

（中学校給食推進室）

1回当たりの学校給食摂取基準

（学校給食実施基準一部抜粋）

区　分	基準値	
	小学校児童の場合 中学年（8歳～9歳）	中学校生徒の場合 （12歳～14歳）
エネルギー（kcal）	640	820
たんぱく質（g）	24	30
値の肉に納めることが望ましい範囲	18～32	25～40
脂質（%）	学校給食による摂取エネルギー全体の25%～30%	
ナトリウム（食塩相当量）（g）	2.5未満	3未満
カルシウム（mg）	350	450
鉄（mg）	3	4
ビタミンA（μgRE）	170	300
ビタミンB1（mg）	0.4	0.5
ビタミンB2（mg）	0.4	0.6
ビタミンC（mg）	20	35
食物繊維（g）	5	6.5

小学校給食の献立
（子母口小学校　9月6日(火)）
ロールパン、牛乳、とり肉のから揚げ、ワンタンスープ、梨

中学校給食の献立
（東橋中学校　9月6日(火)）
ごはん、牛乳、とり肉と大豆のピリ辛あえ、三色ナムル、ワンタンスープ